「奈良きたまち」インターカレッジコンペティション2023

目次

奈良きたまちインターカレッジコンペティションとは？ 2
主催／協力団体紹介 3
スケジュール 4
成果 ぱいのみ（畿央大学） 8
「静かな森の中で」
理想マップ（奈良学園大学） 10
きたまち農園 -「農」を通して、人とつながる
チーム住環（奈良女子大学） 12
ぐるっとバス　きたまちルート
なけん１年ゼミ（奈良県立大学） 14
家族のようなきたまちへ
新きたまち協同組合（同志社女子大学） 16
甦るコンビニ・繋がるきたまち～きたまちストップ～
しかせんべえ（同志社女子大学） 18
新しいきたまちのカタチ
畿央大学 B 班（畿央大学） 20
まちのリビング ～ ともすび ～
きたまち tellers（奈良県立大学） 22
きたまちの情報発信＋α ～ きたまちの魅力を伝えよう ～
未来の社会教育士チーム ver.2（天理大学） 24
きたまちプリズムー人と人、人と地域をつなぐ実践ー
成果発表会 26
審査・総評 28
地域・教員からひとこと 30
謝辞 33
参加者一覧 34

奈良きたまちインターカレッジコンペティションとは？

奈良きたまちインターカレッジコンペティションは、奈良市の旧市街地である奈良町の近鉄奈良駅以北「奈良きたまちエリア」を対象に、奈良町近郊の大学生が地域の支援を得て、さまざまなテーマでの地域課題に取り組むプログラムです。

大学、地域のまちづくり団体、奈良市が協働して実施する民学官連携プログラムで、学生は授業やゼミ単位で約４か月にわたって取り組み、地域のまちづくり団体や住民の協力を得ながらまとめた成果を発表するもので、一般的な大学生のコンペティションではありません。

＜奈良きたまちインターカレッジコンペティションの特徴＞

① 各大学が授業等で取り組む、継続性のあるプログラムです。
② 複数の大学が参画することで多角的な視点を地域に提供できます。
③ 複数の大学が交流することで学生や教員が刺激を受け合っています。
④ 大学と地域のまちづくり団体が連携し取り組み、さらに行政がサポートすることで、それぞれが得意とする役割を担い事業を実現しています。

いま、大学生に求められるもの

地域の課題を読み取り課題解決案を主体的に考える力は、仕事や日常生活のなかでも求められるスキルとして、昨今、大学教育においても重視されています。大学の教室から地域に出て、地域の人とコミュニケーションを取りながら地域を見つめて課題を抽出・分析し、目指す成果をわかりやすくまとめてプレゼンテーションする、これらの力は、学生が実社会に出た際に大いに役立つ力となります。

いま、地域が求めるもの

人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小など、現代の日本はさまざまな課題を抱えています。これらの課題は地域の日常生活にもいろんな形で影響しています。課題をすぐに解決することは難しいかもしれません。しかし、学生が発見した課題やそれを解決する発想が地域に新たな気付きを与えてくれることを期待しています。

主催／協力団体紹介

なべかつ／鍋屋連絡所の保存・活用と“奈良きたまち”のまちづくりを考える会

旧鍋屋交番きたまち案内所の管理・運営とあわせて、奈良きたまちの調査や良さを広く伝えていく取組を行っています。

てんかつ／転害門前旧銀行建物活用協議会

転害門横の旧南都銀行の建物を活用した奈良市きたまち転害門観光案内所をボランティアで運営、管理しています。

きたまちコンセント

奈良きたまちの店舗や団体、施設等をネットワークし、MAPの発行、マーケットの企画などの活動をしています。

大学

2023年は、畿央大学、天理大学生涯教育専攻、同志社女子大学生活科学部人間生活学科都市空間研究室、奈良学園大学、奈良県立大学、奈良女子大学生活環境学部住環境学科が参画しています。

奈良市／新奈良町にぎわい構想

奈良市は、新奈良町にぎわい構想を平成29年に策定し、奈良町の歴史・文化を基盤に、地域のまちづくり活動を原動力とし、生活、観光、生業をつくりだすことを目指して、奈良町に関わる人々と協働したさまざまな取組を行っています。その一環として、アクションプランVer.2に奈良町エリアでの民学官連携による学際プロジェクトを位置づけ、奈良きたまちインターカレッジコンペティションを支援しています。

スケジュール

2023 年 4 月 16 日（日）10：00 ～ 16：00 ／オリエンテーション・まち歩き

奈良県立大学コモンズ棟のイベントスペースでのガイダンス・きたまち概説の後、8 グループに分かれ、きたまちを見学しました。8 人の案内人は、店舗、暮らし、まちの移り変わり、会所や長屋、町並み、川や路地、歴史といった思い思いのコースを案内し、きたまちの魅力と現状を説明しました。

2023 年 4 月～ 6 月上旬
／各大学での授業・現地調査・ヒアリング

まち歩きが終わったら、それぞれの大学の授業やゼミで情報を共有。興味のある内容について議論を重ね、地域課題を深掘りするために、地域の人に協力を得ながら調査やヒアリングを実施しました。

2023年6月10日（土）14：00～16：30
／中間発表

オリエンテーションから成果発表会までの中間にあたる6月上旬、オンライン中間発表会を行いました。なべかつのメンバーはみんなで集まって参加。学生は、自宅や大学、ゼミ室、きたまちといった場所から個人やグループで参加し、さまざまなアドバイスをもらいました。新しい気付きを得た学生は、成果発表会に向けて提案を深化させていきました。

2023年6月中旬～8月上旬
／各大学での授業・現地調査・ヒアリング

中間発表を終えた学生たちは、提案を深めるために再び地域に足を運び、不足している情報の調査やヒアリングを行いました。
成果発表会の直前まで時間をかけて準備を重ね、ひたむきに地域課題と向き合いました。

最優秀賞

「静かな森の中で」

ぱいのみ（畿央大学）
平田いずみ　松井美樹　モーガンみあき

きたまちをあるいて、廃校した幼稚園に着目した。廃園を壊さずに活用することで、維持管理費や公共施設の施設整備のコスト削減、さらには地域コミュニティの維持・活性化を目指した。
周辺環境は正倉院の敷地内にある森林があり、自然豊かな環境の中に位置している。

現地調査のとき屋根は雨がまわって崩壊しかけおり廃墟のような状態だった。

不要な建物は撤去し、内装のみ改修。元々の敷地を活かしたリノベーションに！

廃園を再活用➡放課後デイサービスに！

適しているポイント

- 小学校や旧幼稚園があるから近隣住民が子どもに慣れている
- 静かな環境
- 運動場やプールなどの遊べる環境
- 交通量が少ない
- トイレやシャワー室、キッチンなどの設備が備わっている

そもそも放課後デイサービスって何？

支援を必要とする障害のある子どもが、学校終わりや休日などに通い、個々の子どもの状況に応じた発達支援を受けられる施設。

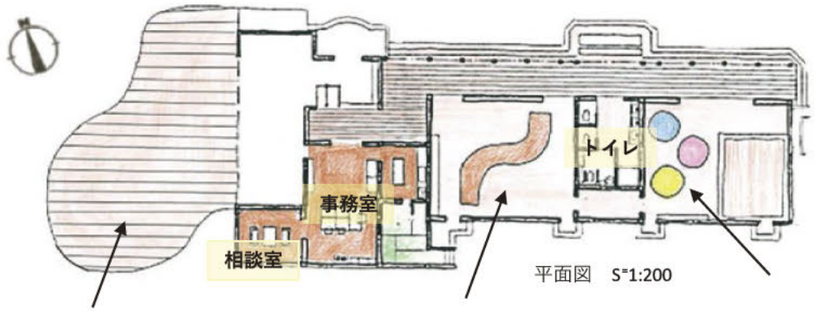
共働きの増加　発達障害のある児童の増加

⇩

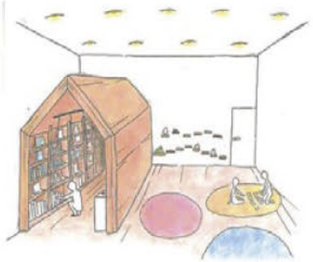
障害のある児童を預かる場
の需要が高まっている

運営について

対象：幼児から小学校６年生　　開園時間：平日14：00~18:30、土日祝9：00~14：00営業
生徒数：10～15人　　教員数：５人　　運営の仕方：コミュニティビジネスとして運営



平面図　S=1:200



こもれびテラス
ステージ×テラス。劇、歌、体操、ダンスなどの発表会や外遊びのときに日向ぼっこに利用する。

静のお部屋
お絵描き。ヨモギなどでお菓子作り、もちろん学校の宿題のサポートも。

静のお部屋
木で作った小さなおうちの中でおままごと、つみき、色を付けた場所で自分のしたい遊び

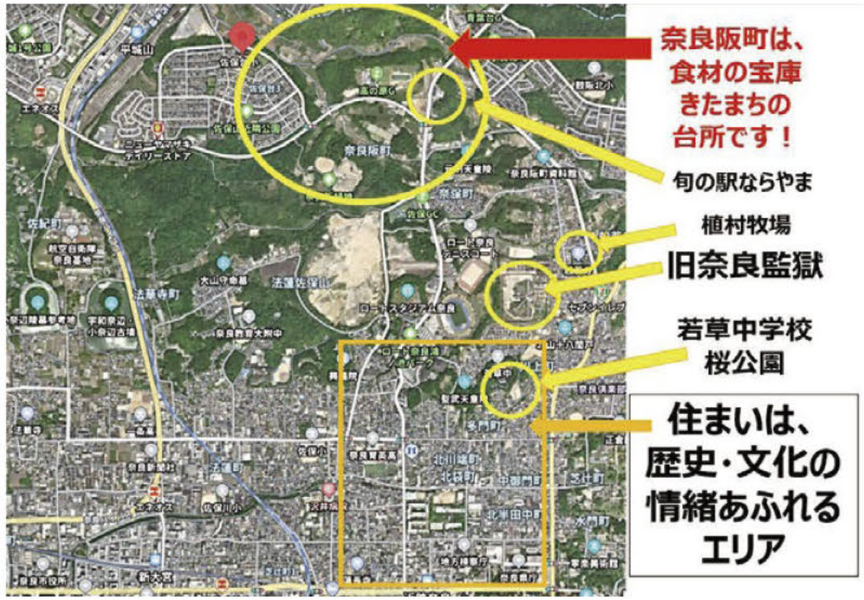
きたまち農園 -「農」を通して、人とつながる

理想マップ（奈良学園大学）
田中泰裕　丸尾拓矢　吉村友希　梶川舞奈

1．問題意識

・少子高齢化といった人口減少問題は、全国の地方都市のすべての問題であること、そして、きたまちには、空き家や空き地が複数あるため、まちの活性化を考えるならば、定住化を促すアイディアが必要であると思いました。

・2020年の国勢調査を見ると、きたまちは、20～24歳の女性が多く居住しています。この女性とは、奈良女子大学の学生であり、彼女たちは卒業後に就職をして全国に散らばると考えられます。そのため、きたまちで何を提案し、誰に定住してもらうことが最も現実的であるかを、「ならきたまち」の地図を見ながら検討しました。



◆まち歩きや地図を用いた検討、情報収集を通してわかったこと

・リゾート会社（旧奈良監獄）によるレジャースポットの創出
・奈良阪町は、野菜の生産が盛んであり、食材の宝庫である
・植村牧場では、牛糞を用いた堆肥工場の設置計画がある
・農地に適した土地の確保や新規就農者のための支援体制がある

本提案は、定住化施策に「農」という魅力を加えることで、きたまちの活性化が図れるのではないか！？と考えたものです。

2．提案　⇒　きたまちに新規就農者を呼び込む

・奈良阪町の農地やきたまちの空き地を利用して、農園をつくる。
・奈良の伝統野菜である「大和野菜」を育て、奈良監獄やきたまちエリアでの販売ルートをつくり、大和野菜の食文化を地域に根付かせる。
・将来は、「農」と「食」をテーマとした市民農園のコミュニティを創出する。
　→たとえば、レシピ交流会等を開催し、「食」の学びの場を広げる。

3．提案概要　⇒　すでに新規就農者への支援体制がある！

1）新規就農者のための農地と住まいの確保－奈良阪町の農地、空き家バンクの活用
2）“奈良きたまち”の気候に合った大和野菜と出荷先の候補
3）新規就農者への支援　－　就農までの6ステップ
4）将来のきたまち活性化プラン　－　「農」と「食」をテーマとしたコミュニティ創出

◆初めから市民農園をつくらない理由

※市民農園の問題点
・需要と供給の不均衡
・土地の制約
・管理とメンテナンスの課題
・資金不足と持続性の問題
・参加者の多様性の欠如

①新規就農者を中核とした市民農園の創出

・年間を通した野菜づくりを学べる講座
・土づくりの講座
・大和野菜づくりの講座
・野菜の即日販売所の設置
・・・etc

②大和野菜の食講座

・大和野菜を使った家庭料理
・大和野菜の保存方法（お漬物など）

③大和野菜の文化講座

・大和野菜をつかった神事
・大和野菜と奈良文化のかかわり

大和野菜

ぐるっとバス　きたまちルート

チーム住環（奈良女子大学）
梶本珠音　近藤真美　泊いくみ　中田優那　藤井美希　堀愛美

■現状

①生協の移動販売
◎　販売車の場所まで出向くため、利用者間の交流が生まれる
✖　品数の少なさから不便さは拭えない

②とくし丸
◎　家の前まで販売車が来るため、重い米や飲料を購入する際は便利
✖　家から出る機会や商品を選ぶ楽しみを喪失しかねない

■インタビュー結果

・移動スーパーは種類と商品数が少ないので近所のスーパーにも行く
・もう少し大きなスーパーにも行きたいけど移動手段がない！

・近所のスーパーに買いに行くのは二度手間だけど、家から出るので運動にはなる！
・地域でコミュニケーションを取れる機会があればいい

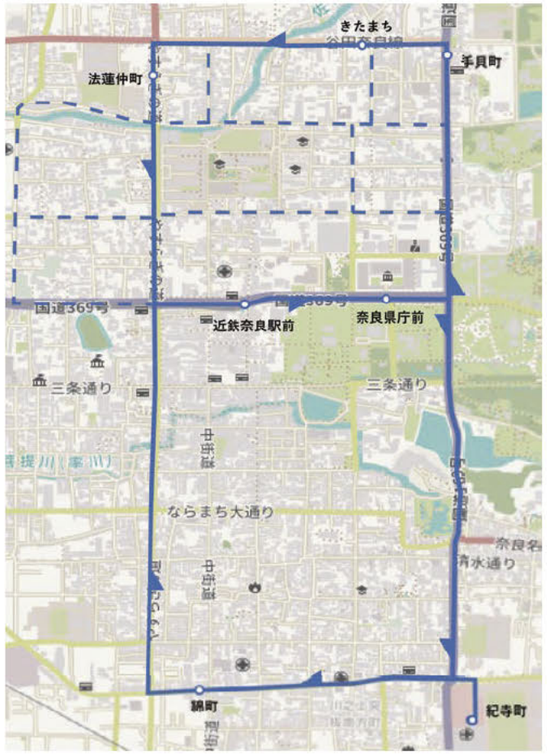
■提案

きたまち住民の方のニーズ
【ほどよく家から出られて、好きな時に多くの商品を選びたい】

ぐるっとバス　きたまちルート

- スーパーや病院へ行きたいきたまち住民を支えるバス
- 既存のぐるっとバスを利用（平日に運行していないルートのバスを活用）
- ルート上のバス停ならどこでも予約することで乗降車可能（＊）

路線図



時刻表	第１便	第２便	第３便	第４便	第５便
きたまち（ビッグナラ若草店跡）	9:00	10:00	12:00	14:00	15:00
法蓮仲町	9:05	10:05	12:05	14:05	15:05
近鉄奈良駅前	9:10	10:10	12:10	14:10	15:10
奈良県庁前	9:14	10:14	12:14	14:14	15:14
紀寺町	9:24	10:24	12:24	14:24	15:24
綿町	9:30	10:30	12:30	14:30	15:30
近鉄奈良駅前	9:40	10:40	12:40	14:40	15:40
手貝町	9:48	10:48	12:48	14:48	15:48
きたまち（ビッグナラ若草店跡）	9:50	10:50	12:50	14:50	15:50

POINT
①１時間かけきたまちと主要箇所をぐるっと走ります
②ゆとりのある時間設定のため安全に乗降できます

■今後の展望

きたまちルートの創設で交通が便利になる一方で、
きたまちの生活を支える移動販売やとくし丸への**買い支えの意識**を高めることも重要。

→バスを利用するきたまち住民に移動販売やとくし丸で使えるお得な**クーポン**の配布、
バス内に移動販売やとくし丸への**ご意見BOXの設置**

佐保地区自治連合会賞

家族のようなきたまちへ

なけん１年ゼミ（奈良県立大学）　今関乃彩　川崎純佳　田畑志佳　田那部綾真
中井琴葉　仲谷優樹 中津美桜乃 福原貫志 藤井茜 三浦茉桜

【きたまち住人への買い物に対する意識調査の結果】

「買い物に不便さを感じる」　65％（62人中40人）
→近くにスーパーがない、車に乗ることが出来ない

①近鉄奈良駅までの交通アクセス
②70歳以上のバス料金100円のサービス
③生協や移動スーパーの宅配サービス

→

しかし
交通面やサービスは悪いと言えない

不便ではあるが
何とか買い物はできている現状

【問題点】

1. 宅配サービス利用の増加による外出頻度低下

スーパー（ビックなら）の閉店
高齢による長距離移動困難者

2. 交流の場が活かされていない

調査時
「若い人と話せることが嬉しい」
という声が多数

【提案と方針：高齢者のQOLの向上】

1.コミュニティスペースの創出

学生と高齢者の繋がりを深め、
高齢者の外出の目的・理由とする

2.なべかつ主催イベントへの学生の参加率上昇

若者と高齢者の交流の機会増加

【コミュニティスペース】

1. ターゲット

地域の高齢者と周辺学生

2. 設置場所

若草公民館周辺空き家
旧細田家住宅
北半田西町空き家

きたまちにある
地域住民の親しみやすさ　×　きたまちに無い
図書館

コンセプト

本を通じた交流
～地域で作り上げる図書館～

①不要な本を持ち寄る
②本を一冊置いていくと、違う本を一冊借りられるシステム
③スペース内にノートを設置し、感想を記入
※その他用途は多種多様
（自習・飲食・休憩・会話…）

→ 借りた者・貸した者同士の互いの姿が可視化されることで地域のつながりを感じられる

【イベントへの学生参加率上昇】

→周辺の大学の学生活動を活かす
なべかつと周辺大学で協力し、イベントの運営を行う

甦るコンビニ・繋がるきたまち～きたまちストップ～

新きたまち協同組合（同志社女子大学）
赤阪澪加子　小浮双葉　寺岡緋南乃

きたまちストップとは？

きたまちの人が作る、きたまちのためのコンビニ

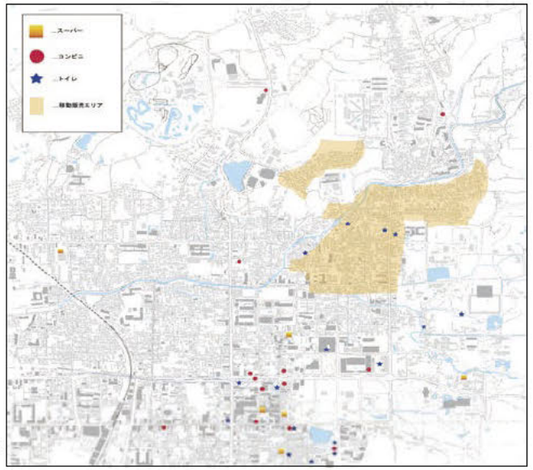
きたまちに住む人たちが、抱える問題を解決するための地域密着型コンビニ。地元の人達で運営を行い、きたまちに住む人たちが世代を超えて繋がることを実現する。

きたまちストップが必要な理由

1. 個人商店の衰退
個人商店が減少している。さらに個人商店からスーパーに変わった場所さえも衰退している。買い物中にコミュニケーションをとることがない。

2. 買い物難民
現在困っていない人も将来に不安を感じている。車がない人や高齢者はバスの本数が少ないため困っていることもある。さらに高齢化により問題は深刻化すると考えられる。

3. 地元民の交流
交流の頻度が年々少なくなっている。高齢者は集まりに参加することが難しく大学生は地域に入るきっかけがないため世代を超えての関わりがない。



スーパー、コンビニ
トイレの分布

事業内容

1. きたまち商店
2. きたまちデリカ
3. きたまちモーニング
4. きたまちのイベント、自治体の活動をまとめた掲示板の設置

運営

労働者協同組合の導入
持続可能で活力ある地域社会を実現するため、出資・意見反映・労働が一体となった組織。

労働者協同組合の導入のメリット
きたまちの人たちが地域関係なく関われることで、きたまち全体で盛り上げることができる。
他事業の町おこしでも活用することができ、将来的にもきたまちの活性化に役立つ。

事業内容の詳細と運営体制

1.きたまち商店

➡きたまちの住民が求める食材の取り寄せ
➡個人商店を地域住民をつなぐキーステーションに

運営メンバー:
・定年退職後の60代.70代
・主婦　・大学生

活動内容:
・カタログの作成
・食材の発注・納品

2.きたまちモーニング

➡登校前の子ども達や、食事を作るのが困難な高齢者に向けた朝食
➡朝食後は保護者たちときたまちに住む高齢者の談笑の場に
➡移住者の方が、きたまちに溶け込む機会に

メンバー:
70代～

活動内容:
朝食作り

3.きたまちデリカ

➡きたまちの食材を使ったお惣菜を販売
➡家庭菜園の作物を使ったお惣菜の販売

メンバー:
・定年退職後の60-70代
・主婦

活動内容:
・お惣菜の調理
・パックへの盛り付け

各々の活動する時間は組合員同士の話し合いで決めるため、それぞれのライフスタイルに合わせた働き方ができる。

チェーン展開

◎「これが欲しい」「あれが食べたい」と思ったら、すぐに出かけて購入できる"手軽さ"がコンビニの醍醐味
➡きたまちストップの商圏は徒歩10分以内で来店できる半径５００m程度が理想
「ちょっときたまちの人と喋りに行きたい」「ちょっとお惣菜買いにでかけよう」と気軽に寄れる

◎きたまちのためにお互いに助け合う"相互扶助"の理念は変わらず、それぞれの地区の特性に合った事業を行う

新しいきたまちのカタチ

しかせんべえ（同志社女子大学）
井上遥菜　飯塚千宙　鈴木七海　村田遥

憩いの場としての鼓阪小学校

憩いの場の特徴

- **愛着のある**場所
- **思い出を語れる**場所
- **老若男女問わず**楽しめる

鼓阪小学校

- 令和5年に創立150周年
- 豊かな自然に囲まれた歴史のある小学校
- 地元の人々に愛されている小学校

➡ 令和8年に向けて鼓阪小学校と佐保小学校を統合再編する計画
➡反対活動が行われるほど**関心が高い**
➡**唯一無二の魅力**をもつ小学校

観光の力も活かし小学校のカタチのまま存続させられないか？

提案【コンセプト】

みんなが共に学べる学校

世代を超えて地元に愛されてきた思い出がある場所だからこそ、地元だけでなくもっと広く愛される場所にできたら！

「来て、見て、撮るだけ」の観光ではなく、きたまちの魅力を学んで体験できる観光へ

プログラム

① 授業
➡きたまちのことを学ぶ授業を実施

社会：地元の方が先生となり今と昔をテーマにして思い出が語れるような授業に。

理科：フトルミンを復活させよう大作戦を実施。フトルミンについて知り、味わうことができる。

図工：きたまちの風景を描くスケッチ大会を実施。みんなが描いた絵を飾るスペースも用意。

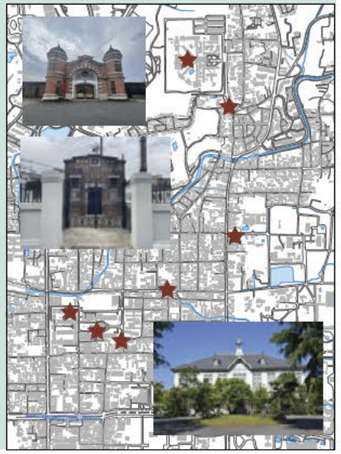
② 給食
➡奈良やきたまちの食材を生かした食事の提供

- 大和野菜を使用してオリジナル給食を作る
- 実際の給食を提供する
- 地元で生産されている商品を使う
- 地産地消、商店の宣伝にも繋がる

③ 遠足
➡ガイドと共にまち歩きすることで「きたまち」を理解し意味のある観光に
➡名所の意外な見どころなど、個人旅行では知ることのできないディープな情報を学べる

- 様々な意味が込められているお地蔵さんを巡るスタンプラリー
- マニア向け？な近代建築物巡り
- 絶景を見渡してゆっくり巡り

▼近代建築物マップ



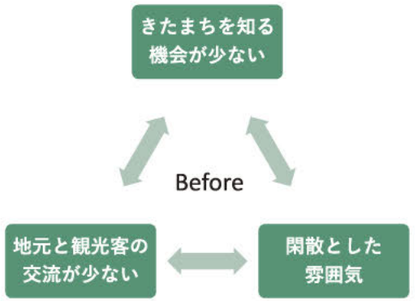
④ 芸術鑑賞
➡色とりどりの物語を校舎の壁や塀に浮かび上がらせるプロジェクションマッピング

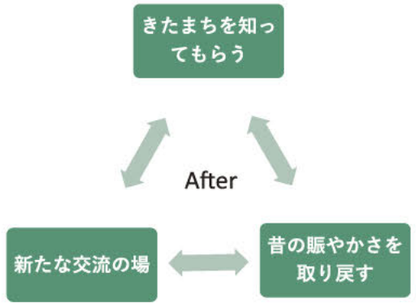
- 子供たち考案のデザインでも実施

その他にも・・・

グラウンドの活用
➡持ち込み可の休憩スペース（まち歩きの際の休憩スポットに）
➡地元の方々の憩いの場（盆踊りなどの地域のお祭りの場として存続）

私たちが考える「新しいきたまちのカタチ」とは？





まちのリビング ～ともすび～

畿央大学 B 班（畿央大学）
赤塚柚香　朝倉莉世　岡田彩夏

街歩きとヒアリングをして分かったこと

- 歴史的スポットが点在
- 日常の買い物の場が少ない
- 観光客向けのサービスが多い
- 移動販売によるコミュにケーションを重視

近距離に自分で選べる買い物の場所かつ年齢問わず

コミュニティを広げられる場所が必要

コンセプト

TOMO-SUBI
―燈結―

買い物 × コミュニティ

家の要素をきたまちに

・家の要素を町に点在
　→　周辺の商店の活発化、集客
・空き家というポテンシャル
　→住民も観光客も利用できる
・住民と観光客が共に買い支える仕組み
・徒歩圏で利用可能
・コミュニティが築ける

提案

KITCHEN × DINING

- シェアキッチン部分は有料で地元の人は会員制、短期・短日利用の方は電子決済
- カードリーダーでの管理…子どもが利用する際は、保護者に通知がいくシステム
- 平日はシェアキッチンとして、休日はレンタルスペースとしてチャレンジショップも開ける
- 子どもの習い事として食育を促す

LOUNGE × BAR

- 昼はカフェ、夜はバーに
- 夜は遅くまで経営し、ニーズに対応

PANTRY

- 量り売りの導入
- 野菜、肉、穀物、コーヒー豆 etc…
- 利用者には可能な限り容器を持ってきてもらう
- 日用品、一般食品も取り扱う

GARDEN

- 普段は広場、公園のように使用
- 集会に使用したり、イベントの開催ができる
- 夜は立ち飲みのできる場にも

効果

・地域住民と観光客が共に活用し繋がる
・フードロス対策でSDGｓに貢献
・空き地、空き部屋の活用、整備
・住みながら働く

→

- 新しいコミュニティ
- 新しい店の支え方
- 新しい住民の増加

きたまちの情報発信＋α ～きたまちの魅力を伝えよう～

きたまち tellers（奈良県立大学）
篠原優哉　豊島開　由井涼子

【1 背景・目的ならびに調査方法】

背景
まちあるきを経ての疑問：
きたまちには多くの魅力的な資源があるのに、それを知らなかったのはなぜか

↓

きたまちでは、どのようにして地域の情報を発信しているのか

目的
きたまちでは各関係団体・機関が、いかなる背景・意図で、どのような情報発信を行っているのかその現状を調べる

↓

特徴と課題を把握し、実態に即してきたまちのこれからのより良い情報発信のありかたを思考・提案

調査方法
予備調査（まちあるき・インターネット）

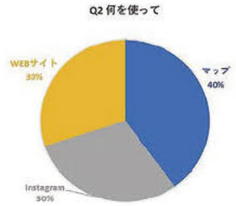
↓

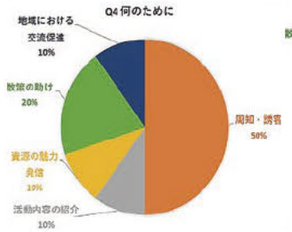
ヒアリング調査（きたまちコンセント，なべかつ，まちけん，てんかつ，奈良町にぎわい課，奈良市観光協会）

各々の設立背景や活動目的と併せ、マップ/リーフ・パンフレット/WEBサイト/インスタグラムの利活用状況、情報発信の体制や悩みについて伺いました。

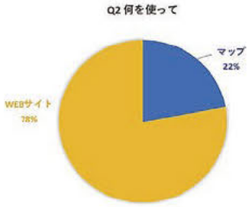
【2 調査結果の分析・考察①】

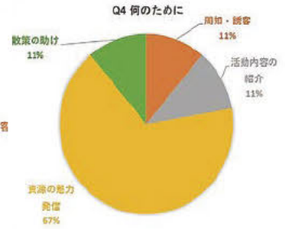
きたまちコンセント



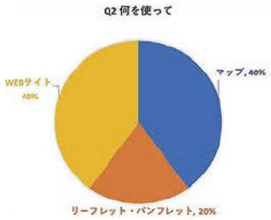


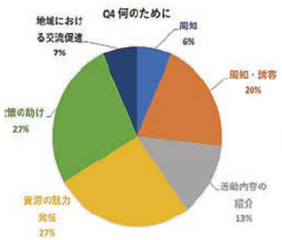
なべかつ



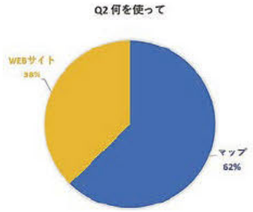


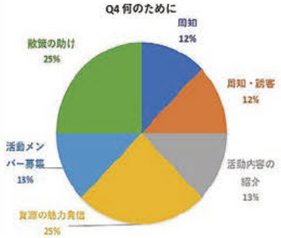
奈良町賑わい課





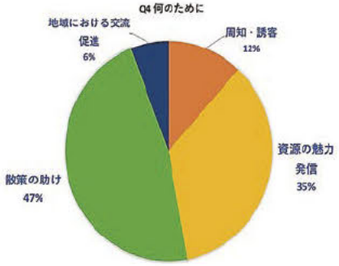
まちけん

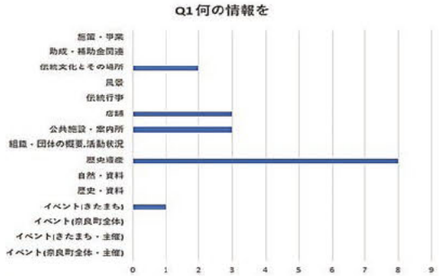




【3 調査結果の分析・考察②】

◆大半の団体・機関が使用している情報発信媒体➡マップ





直接的役割のほかに「資源の魅力発信」も担っているが、その内容はやや偏向しており、風景や伝統行事に関する情報の掲載はなされていない。

↓

マップの役割をより広げる＋αの工夫ができるのではないか

◆全団体が利活用の意識はあるが、用途・方法・体制面の課題により
現在は１団体のみ使用している情報発信媒体
➡インスタグラムInstagram

発信目的は「周知・誘客」のみで、内容は主に店舗・イベント紹介

↓

動画や写真をコンテンツとするInstagramの特性を活かすと、「資源の魅力発信」も担える＋αの工夫ができるのではないか。

【4 提案内容】

①四季の風景のマップの作成

- 写真付きでイメージしやすいように
- どの風景がどの季節のものかわかるように

例：きたまち三景

- 佐保川の桜
- 般若寺のアジサイ、コスモス
- 商店街の様子　etc.

②きたまちの時間の流れる様子をInstagramに動画投稿

- きたまちの雰囲気やまちの風景がより鮮明に伝わるように

③マップの置き場所に種類別にポップアップを作る

- 各団体・機関が様々な思いのもと作成した多種多様なマップの各々の特徴を、手に取る人が分かりやすいように

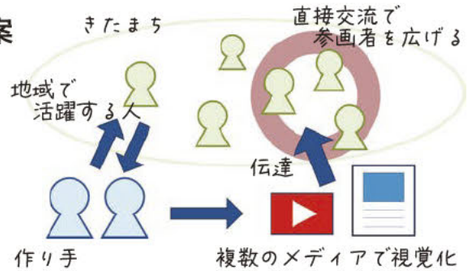
きたまちプリズム－人と人、人と地域をつなぐ実践－

未来の社会教育士チーム ver.2（天理大学）
東拓実　田辺七海　木村愛美　荒木涼介　香川万里子　金子咲由加

昨年度のインカレでの発表

◇ 地域のつながり、交流の希薄化
◇ きたまちへの想い溢れる案内が魅力的
◇ きたまちに愛着をもつ人の魅力を
　　発信して、つながりを支えたい

◆「地域の魅力にせまるメディアの創出
　ー語る・つながる きたまちプリズムー」の提案



今年度の活動 ー昨年度の提案を実践ー

4月	まち歩き
5月	地域の人・自治体関係者に事前調査
6・7月	動画収録
7月	動画・かわら版編集、上映会

事前調査で気づいたこと

◆ メディアを分けると世代で断絶が生まれる
◆ 活字メディア・動画メディアをただ公開しても、直接交流は生まれない
◆ 地域の人は「地域の歴史」を残してほしいと思っている

地域で活躍する人 ＝ 地域の魅力 ≒ 地域の人が感じる魅力

今年度の具体的なアクション

◆ 動画の収録・編集
　奈良市転害門観光案内所 運営団体 てんかつ 会長
　工場跡 主宰

てんかつ会長

工場跡主宰

◆ かわら版の制作

◆ 上映会
　「Edit 輝多まち」のプロトタイプとして、直接交流の場づくり
　動画やかわら版のフィードバックを得ることを目的に実施

直接交流の場でみえてきたこと

◆ あらゆる人が聞き手であり、語り手である
　動画・かわら版のフィードバックの場という想定を超えて、
　情報を伝達する相手（＝聞き手）だと想定していた人たちが、
　参加者同士で自然と「地域の歴史」を語り合う

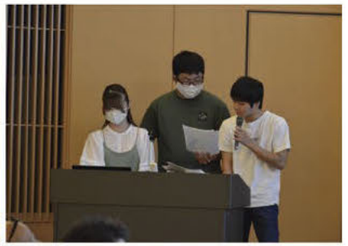
人と人、人と地域をつなぐメディアとは

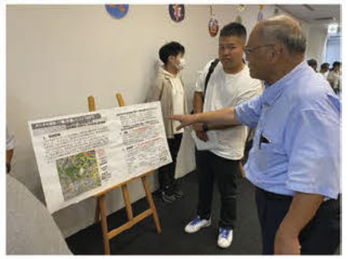
◆ メディア ＝ 期待感を共有できる、期待感が芽生える「場」
　「きたまちプリズム」や大学の関わりはきっかけに過ぎない
　活動を通じて「やれるかも」「できるかも」といった予感を共有できた

「自分たちのまちをみんなで残して愛す」
上映会参加者アンケートより

成果発表会

2023 年 8 月 6 日（日） 12:30〜16:30
はぐくみセンター 9F 大講座室





表彰

最優秀賞
「静かな森の中で。」ぱいのみ / 畿央大学

奈良市賞
「きたまち農園－「農」を通して人とつながる」理想マップ / 奈良学園大学

優秀賞（具体性）/ 鼓阪地区自治連合会賞
「ぐるっとバス きたまちルート」チーム住環 / 奈良女子大学

優秀賞（説得力）/ 佐保地区自治連合会賞
「家族のようなきたまちへ」なけん1年ゼミ / 奈良県立大学

優秀賞（先駆性）/ 鍋屋連絡所の保存・活用と奈良きたまちのまちづくりを考える会賞
「甦るコンビニ・繋がるきたまち〜きたまちストップ〜」新きたまち協同組合 / 同志社女子大学

優秀賞（先駆性）/ 転害門前旧銀行建物活用協議会賞
「新しいきたまちのカタチ」しかせんべえ / 同志社女子大学

優秀賞（調査分析力）/ きたまちコンセント賞
「まちのリビング〜ともすび〜」畿央大学B班 / 畿央大学

優秀賞（調査分析力）/ きたまち賞
「情報発信の＋αーきたまちらしさを伝えよう」きたまちtellers / 奈良県立大学

実践報告

「きたまちプリズムー人と人、人と地域をつなぐ実践ー」未来の社会教育士チームVer.2 / 天理大学

審査・総評

全てのプレゼンテーション終了後、以下の４名の審査員により

◆先駆性
◆具体性
◆調査分析力
◆説得力

などの観点から厳正な審査を行いました。

各審査員からの講評

奈良きたまちインターカレッジコンペティションも３年目のプログラムを終えました。お疲れ様でした。協力くださったきたまちの皆さん、ありがとうございました。新しくメンバーになった大学もあり、それぞれのチームが、異なる専門分野・取組体制（授業・演習科目で、研究室・ゼミ単位で）で、それぞれの特徴を活かした提案だったと感じました。また昨年の提案を検証し実践を重ねたチームもあり、頼もしく思いました。

総じて、調査・分析・課題抽出（明確化）・提案という流れは明快で、きたまちを歩き、皆さんとの語らいのなかで、課題を洗い出していました。よほど印象的だったのか「買物難民」をテーマに選んだチームが多かったことには驚かされました。一方で提案に対する評価は分かれました。ポイントになったのは、きたまちのよさ・ウリどころの再評価と活かし方です。調査段階で課題と一緒に調べていても、うまく活かされていない（or 語られていない）提案もありました。いま全国の歴史的市街地ではさまざまな取組が行われています。情報も共有しやすく、「高齢化地域課題対処方程式」のようなものに、対象をあてはめることも可能になってきます。そうすると、どれだけ具体的な場所・建物・人に即して語れるか、それが提案に説得力をもたせ、共感をよび、また一緒に取り組もうという思いにつながることになります。次年度のインカレの、さらなる展開を楽しみにしています。

大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）館長
奈良女子大学・京都大学名誉教授
審査員長　増井正哉

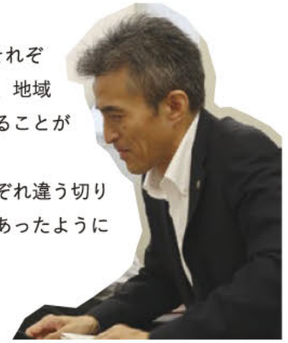
３回目の審査を終えて感じた事は学生諸君がその時点での地域が直面している課題を的確に捉えてコンペのテーマに選択して地域とのヒアリング・調査分析をし、解を提案プレゼンしていることです。前２回は問題点をハード面（建築的）でとらえ、空き家・解体跡の駐車場の多さに着目し、計画図、模型等と共にプレゼンしていたが、今回はソフト中心で、今地域が直面している一番深刻な課題である買い物難民の増加（特に高齢者）、地域活性化等に対する対処方法のプレゼンが多かった。以上的確なプレゼン内容であったが、一方で若者である学生諸君の斬新なテーマや想いのプレゼンテーションを期待するところです。

鼓阪地区自治連合会副会長
有山　行基

今年度の研究発表については、地域の緊急課題を素直に把握研究されましたことに驚愕いたしました。鼓阪地区における廃園の再利用構想、また既設小学校校舎の現状と将来への利用促進についての発表は、審査側が感銘を受けました。また複数の大学が「買い物難民」について発表されました。私たち地域活動でも、現在緊急課題として研究していますところであり、今般の具現化されている発表内容に感動を覚えました。
今後、地域と大学が協働して解決に向け活動いたしたく考えております。
この様なコンペの機会にめぐり合わせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

佐保地区自治連合会会長
岡崎　忠直

今回初めてインカレ審査員として参加させていただきました。
６大学、９つのグループから成果の発表がありましたが、どのグループも若者らしい視点でそれぞれ特徴があり良く考えられているなと感じました。発表のテーマも観光、コミュニティ創出、地域交流、情報発信など様々ありましたが、その中には行政として今すぐにでも事業に取り入れることができそうな提案もあり、とても興味深く聞かせていただきました。
また今回、複数のグループが「買い物難民対策」をテーマとする発表を行いましたが、それぞれ違う切り口で独自の提案がされていて、若者が持つその発想の柔軟さや多様性に学ぶべきものが沢山あったように思います。



奈良市観光経済部部長
栗山　稔

地域・教員からひとこと（50 音順）

このプロジェクトではお世話になろう（車を持たない独居老人として）。このプロジェクトでは助っ人で参加しよう（高齢者だけど元気な住民として）。みなさんの素晴らしい発表の中に「関わる私」が見えましたよ。「奈良きたまち」をご案内したかいがございました。またお会いしましょう。奈良で。奈良きたまちで。

新井　忍（なべかつ／きたまちコンセント）

学生のみなさんのきたまちへの興味、課題の絞り方が深化してきています。今後、学生のみなさんにとって、きたまちが「研究対象」からさらにもう一歩進んで、「活動のフィールド」「人生の大切なまち」のひとつになっていけば、すてきだなあと思っています。

倉橋　みどり（きたまちコンセント）

皆さんと一緒に地域を歩き、地元の方々に話を聞く中で、改めて地域が抱える課題の深刻さに触れることができました。これからは、皆さんからの貴重な提案をヒントに、課題解決に向けて検討を重ねたいと思いますので、引き続きご協力をよろしくお願いします。

山口　育彦（てんかつ）

歴史を通じて変わりゆく「きたまちの今昔」を説明させていただきました。きたまちも時代の流れと高齢化により町は大きく変貌しました。この現状を踏まえ学生さんたちはよく調べ考えて前向きな取り組みを発表されたことは有意義なことでした。昨年とは違う新しい発想で提案していただいたことが実現するよう期待いたします。

吉田　守（なべかつ）

今年も学生の皆さんと街歩きをしながら、町の歴史やウィズコロナの時代に町の社会がどのように変化してゆくのかといった話題で話し合いました。今年度は発表の前に中間発表を聞いて意見交換する機会があって、学生さんと地元民の間でとても充実した意見のやり取りができたと思います。

倉本　宏（なべかつ）

今年は買い物をテーマとした取り組みが多く見られましたが、それぞれ違った視点での有意義な提案でした。買い物以外をテーマとした取組みもそれぞれ非常に参考になる力の入ったいい提案ばかりでした。インカレの取組みは地域にとっても刺激になることが多いです。今後も地域と共同してこの取組みを発展させていければと期待します。

瀬渡　比呂志（なべかつ）

同じフィールドで同じようにまち歩きをしても、様々な視点で課題を見つけ、また今年も、いろとりどりの魅力的な提案がなされたことに、あらためてインカレの素晴らしさを感じました。この場をつくりあげてくださった全ての皆さんに感謝申し上げます。

清水　裕子（畿央大学　健康科学部人間環境デザイン学科）

この度、地域の方々や奈良市役所からの協力を頂き、誠にありがとうございました。各チームは、多様な視点から地域課題にアプローチして、想像力を働かせて、将来の夢や実践的な解決策も提案しました。今回の経験や提案成果が皆さんにとって糧となると思います。

陳　建中（畿央大学　健康科学部人間環境デザイン学科）

3 年目、きたまちの「魅力」や「課題」を改めて実感する。また、私自身まだまだ気がつくこともあり、大変貴重な機会となりました。学生の皆さん。インカレを経ての気づきと学び、お世話になった方々への感謝の気持ちを忘れないでくださいね。

中井　千織（畿央大学　健康科学部人間環境デザイン学科）

ある場所がもつ価値と課題を丁寧に読み解く作業は、面白くそしてとても大変でもあったと思います。丁寧な観察からは、発見があり、そして発見からは新たな課題解決につながる発明がうまれます。今回の経験を糧にし、今後の研究、制作活動においても、この観察 / 発見 / 発明のサイクルをぜひ実践してください。

前川　歩（畿央大学　健康科学部人間環境デザイン学科）

地元の皆様の姿・言葉・思いの中に自分たちにできることを重ね、それを形にしようと試みる経験が、一人ひとりの学生に大きな学びと成長をもたらしてくれました。今後もまちや人、そこで生まれるつながりや活動に学び、奈良きたまちへのかかわりを学生とともに探究していきます。2 年間、本当にありがとうございました。

杉山　晋平（天理大学　人間学部人間関係学科）

このプログラムは、本気で取り組むほど大変さとともにやりがいを感じられる充実したプログラムだと思います。地域の皆さんとのたくさんの語りを通じて地域を理解し課題に取り組むというプロセスが、多くの気付きや驚きの発想につながっているように感じます。これからも地域のチカラを大切に！

田中　梨絵（天理大学　人間学部人間関係学科）

今年は 2 チーム参加しましたが、地域の方々に叱咤激励いただき、なんとか提案まで漕ぎ着けることができました。右も左もわからない中、学生さんも頑張りました。私自身も 2 年目で、昨年度に比べてきたまちとの距離感が近くなったように思います。お世話になった皆様、ありがとうございました。

麻生　美希（同志社女子大学　生活科学部人間生活学科）

奈良学園大学は今年度から参加しました。まち歩きに参加し、地域住民の方々から直接お話を聞く機会があったことで、学生は実感をもって地域課題を考えることができました。今回、辰巳さん、村田さん、黒瀬さん、前田さんには、快くインタビューを引き受けてくださいましたこと、心から感謝申し上げます。

岡野　聡子（奈良学園大学　人間教育学部人間教育学科）

参加して 2 年目。きたまちの魅力とそのありようを巡る課題の解決について、多様な視座から検討した結果が一堂に会した光景は圧巻でした。学生の皆さんの糧になると共に、きたまちの現在と未来に資するものになることを願っています。

井原　縁（奈良県立大学　地域創造学部地域創造学科）

実際に地域を歩いて、見たり聞いたりして、そして行動して学んだことは生涯役立つ能力となり、今後の激しい社会環境の変化に対応できる力となるはずです。学生の皆さんの今後の学生生活が充実することを願っています。また、このような素晴らしい活動を運営していただいた関係者の皆様にお礼申し上げます。

村瀬　博昭（奈良県立大学　地域創造学部地域創造学科）

受賞チームの皆さんおめでとうございます。一方で今年は、それぞれの発表を聞きながら、賞は審査員次第かもしれないなとも感じてもいました。全体にレベルが上がっている印象で自分で審査したら、かなり迷ったと思います。きたまちの皆様には頼ってばかりですが、これからも引き続きよろしくお願いいたします。

山本　直彦（奈良女子大学　生活環境学部住環境学科）

謝辞

皆様、ありがとうございました。この合同授業を 3 年も続けてこられたのも、なべかつ、てんかつ、きたまちコンセント、奈良市奈良町にぎわい課の皆様のおかげです。

初年度のコロナ禍の影響を受けて行ったパソコンを使ってのリモートまち歩き、そのための資料作りに始まり、今年度の初夏暑い日差しの中でのまち歩き、長時間におよんだ発表会まで、本当に皆様にはお世話になりっぱなしです。おかげさまで、参加大学も徐々に増え、今年は 6 大学が参加しました。

毎年のことですが、学生以上にドキドキしながら、発表を見守っているのは私だけではないでしょう。発表会は 3 回目ですが、発表する学生は毎年新しく授業を履修する初めての新人です。しかし、我々教員の不安をよそに、発表会は盛会のうちに終わりました。発表される内容は、1 年目よりも 2 年目、3 年目と、課題のとらえ方も深まり、提案も充実し、興味深いものになってきたように感じます。少しは皆様の期待に応えられたのではないでしょうか。

そもそも、この授業の目的は二つあります。一つ目は、複数の大学で同じ地域「きたまち」を調査し、発表し合うことで互いを刺激し合い、気づきを与え合うこと、つまり学生の教育です。二つ目は、さらに、その成果を地域に返せれば、学生の考えた提案をヒントにして何か実現できれば、地域は少し元気になるかもしれない、というところにあります。

気になるのは二つ目の目的です。いまだ緒についていないような気がします。来年度は実現できる方法を含めて、より具体的な提案ができれば、と考えています。一緒に進め方について考えていただければ幸いです。

日ごろから、この試みにご理解と惜しみないご協力を賜り、ありがとうございます。

畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科教授　三井田　康記

奈良きたまちインターカレッジコンペティションは、今回で 3 回目を迎えることとなりました。年々充実を遂げている本取組でありますが、今年も多くの大学生の方々に参加をいただきました。地域の皆様や関係機関へのヒアリングをもとに、それぞれのチームが独自の視点で、約 4 か月間にわたる成果をまとめ、すばらしい発表をされたことをお喜び申し上げます。また、地域の皆様によるご協力のお陰で、大変意義深い発表会となりましたこと深く感謝申し上げます。

地域における様々な課題を解決するにあたり、大学生の方々の柔軟な視点は、様々な気付きをもたらしてくれることと思います。また、若い人材が、地域の皆様とともに地域課題に取組むことは、若者の地域への理解を促し、地域で活躍する若い人材の育成につながることでしょう。同時に、地域の皆様にとっても、新たな気付きをもたらし、地域の活性化につながることと期待しております。

本プログラムに参加くださった大学生の皆様が、今回の経験を生かし、地域を担う人材として一層活躍されること、また地域の方をはじめ多くの方々にご協力いただきましたこの取組により、協働のまちづくりの機運が更に高まっていくことを祈念いたします。

奈良市長　仲川げん

参加者一覧

○参加学生

畿央大学
「ぱいのみ」 平田いずみ　松井美樹　モーガンみあき
「畿央大学 B 班」 赤塚柚香　朝倉莉世　岡田彩夏
天理大学
「未来の社会教育士チーム ver.2 」 東拓実　田辺七海　木村愛美　荒木涼介　香川万里子　金子咲由加
同志社女子大学
「しかせんべえ」 井上遥菜　飯塚千宙　鈴木七海　村田遥
「新きたまち協同組合」 赤阪澪加子　小浮双葉　寺岡緋南乃
奈良学園大学
「理想マップ」 田中泰裕　丸尾拓矢　吉村友希　梶川舞奈
奈良県立大学
「きたまち tellers」 篠原優哉　豊島開　由井涼子
「なけん 1 年ゼミ」 今関乃彩　川崎純佳　田畑志佳　田那部綾真　中井琴葉　仲谷優樹
中津美桜乃　福原貫志　藤井茜　三浦茉桜
奈良女子大学
「チーム住環」 梶本珠音　近藤真美　泊いくみ　中田優那　藤井美希　堀愛美

○事業参加団体

「奈良町・大学間協議会」
畿央大学、天理大学生涯教育専攻、同志社女子大学生活科学部人間生活学科都市空間研究室、
奈良学園大学、奈良県立大学、奈良女子大学生活環境学部住環境学科、
きたまちコンセント、転害門前旧銀行建物活用協議会（てんかつ）、
鍋屋連絡所の保存・活用と奈良きたまちのまちづくりを考える会（なべかつ）、奈良市　（50 音順）

発行日	令和 5 年 12 月
発行	奈良町・大学間協議会、奈良市
表紙デザイン	畿央大学 健康科学部人間環境デザイン学科 中井千織
編集	畿央大学 健康科学部人間環境デザイン学科 中井千織、天理大学人間学部人間関係学科 田中梨絵 同志社女子大学 生活学部人間生活学科 麻生美希、奈良県立大学 地域創造学部地域創造学科 井原縁、 きたまちコンセント 倉橋みどり、奈良市 観光経済部 奈良町にぎわい課 高洋平

表紙：旧鍋屋交番 きたまち案内所